

びに視野は移りかわり、セント・エライアスの巨峰が目まぐるしく展開する。隊長の顔は興奮と満足に照り輝き、そのシニールはなめらかに雪面を彩っている。井上の特訓が今になって偉大な効果をもたらしたのだろう。驚いたことに、坂西は片足で滑っている。何と彼は片足を雪に突っこんでは急激に停止し、足を空中に引き上げて再び滑り出すという新しいスキー術を駆使しているのだ。それにしてもう一本のスキーは何処にあるのだろうか。それは斜面下端の大きなクレバスの向う側に突きささっていた。見上げると美しく白い雪の肌は、登るときとはちがって傷だらけになっている。われわれは深い後悔の念にかられたが、これも仕方ないことだと自らにいい聞かせた。

ベースキャンプまでの滑降は実にすばらしいものだった。表面が適度に氷化した氷河はスキー操作を何倍にも楽にさせてくれた。坂西は一瞬のうちに姿を消した。キャンプまで一直線だろう。体重にものをいわせた彼の直滑降には定評がある。先生はシユテムボーゲン、私はシユテムクリスチャニアと、それぞれに無限の斜面をかけた。ベースキャンプでは熱い紅茶が待ち受けていた。

(坂本記)

ウォールシニール峰登頂

雲は五千メートルから上をすっぽりとおおっていた。A・B・Cからスティール頂上へ続く尾根の上に、アタック隊員の姿がポツリと黒い点になって見えた。昨日スティールを登頂した四人は、少し天候の悪化してきた中をA・B・Cへ帰って来る。B・Cへ装備を運んで、今再び、僕はA・B・Cへ登って来たところだ。二度と来ることはない

という思ひから、丸山南尾根を少し登り、アタック隊を出迎える。

巨大なくじらが横たわっているようなローガンが斜陽に照らされ、陰影を濃くしている。ちょうどその背のあたりから上は、平たい層雲につつまれていて、残光に照らされたその下方の稜線は稲妻のように屈曲し、幾重にも並んでいる。今までになかった美しい光景に、しばし見とれてしまった。

三週間を過ごしたA・B・Cは何度かの積雪のために、すっかり穴の底に沈んでしまい、テントを撤収した跡は断崖のようになっていた。われわれ七人は驚くほど薄暗くなった氷河の上をベースキャンプに向けて下った。スティールを終えた今、残るものはウォールシニールのみである。今までウォールシニール登頂のためにという気持で何事もやった。赤旗を回収したのも、一日でA・CとA・B・Cを撤収してしまったのも、一日でも無駄にしてはならないという配慮のあらわれだった。これでウォールシニールに向けて全力投球ができるのだ。何故かその夜の僕は目が冴えて眠りにつけなかった。

登路の偵察

七月二十日、ここ数日はすっかり天候が安定し、少々ガスがかかる程度で、太陽がさんさんと照り続けている。今日も暖かい晴天の一日がやってきた。休養日と決めていたが、正午までシユラフに潜り続けたので、身体も正常になった。三つのテントは入口を中に向けてT字形に張ってある。その間にテントフライを敷いて、ここで食事の用意をする。さっそく上半身裸になって日光浴を始めた。直射日光は暖かいというよりも熱いといった感じがする。アラスカルールと名付けて、沈の日には必ずやったセブンブリッジがまたまた開張され、「ウシシ、ウヒヤーノ、ドヒヤーノ」と奇声を発し、コッフエルが沸騰しているのにも気付かないほどの熱中ぶりだ。その横では中西隊長と増田さんが基盤を囲んでいる。ブリッジの方は四人でやるので、負けた者が食事の用意をすると、七人のうち一人も眠る者？は

いないわけだ。全く楽しくてしかたのないといったベース生活だ。時々、ザイという音を発する雪崩がウォルシュのアイスフォールを落下する。末端のデブリが、するすると舌を延すように大きくなる。テントの周囲の雪も木っぼいザラメ雪で、ずっばずっばと膝まで潜る。いまが真夏である証拠だ。

ゴオーと低く遠く飛行機の音が聞え、やがて氷河の下流から機影が近づいて来る。B・Cの上空を旋回し、踏み固められた二十五の数字を確認して、氷河の彼方へ消えて行った。文明の世界から唯一の連絡方法として、このチェック・フライトが約束されていた。さあもうすぐ迎えが来るぞと思いつながら、ウォルシュの頂と去って行く機影を見くらべる。

ウォルシュはアイスフィールド山群の東南端のピークだ。B・Cはちょうどその真西の足元にある。B・Cからは何の障害もなく千六百メートルの壁が頂上までそそり立っている。四千六百メートル Four Thousand Feet。マッシブな安定した山だ。

その登頂可能なルートは、ステイル峰の登山中に誰もが考えた通り、頂上からわれわれのいる氷河へおりている稜線だ。西稜と違ってよいだろう。西稜と南稜の間に小さなピークがあって、それと西稜の間にはカールが、そして小さなアイスフォールとなってスプリング氷河へ落ちていく。このため西稜にルートを求めると、アイスフォールをトラバースして、西稜末端のピークへ取り付かねばならない。この氷河のトラバースが第一の問題点であった。末端のピークからは、急傾斜の雪稜が一直線に高度を上げ、三千八百メートルあたりで一旦傾斜が落ちて頂上下の広い急傾斜の尾根まで続いている。この頂上下の四五百メートルの尾根は、所々岩が露出しているが、頂上直下の八十メートルほどを除いて問題はなさそうだ。その手前、傾斜はさほどなさそうだが鋸状のナイフリッジはかなり苦勞すると思われる。登頂にはB・Cからアタックできるものと考えられる。以上は、ステイル峰への攻撃中にドンジュク氷河右俣から丸山の頂上から見て解った事だ。ドンジュク氷河は、ウォルシュ峰の西側われわれのB・Cのある所から、ウォルシュ峰の南を廻って東側を北へ流れている。それで独立峰のようになっていくわけだ。帰路のヘリコプターから

ウォルシュの南面と東面を見たのだが、アイスフォールと黒々とした岩壁が複雑に入り乱れて壮烈さを醸し出していた。北へは、右にドンジュク氷河を左にスプリング氷河を従えて、数個のピークの連なる稜線が二つの氷河と共にユークソンの原野に消え落ちてしまう。この北稜もルートとしては非常に困難なものだ。

残念な事にウォルシュも処女峰ではない。アメリカ人、ウッド博士の一行に西稜から頂上を許している(一九四一年)。新しいところでは、ユークソンの百年記念登山隊に登られているが、ルートはやはり西稜であった。

さて、愉快な昼食を済ませて増田、中村、井上の三名はウォルシュの偵察にB・Cを發した。スプリング氷河とのコル(ウォルシュコル)へ向って一直線に氷河を渡って行く。久しぶりに新しい所へ行くので、生き生きとした未知なるものへの好奇心が目覚めて、楽しくてしかたがない。日射で緩んだザラメ雪にスキーを滑らせる。百メートル間隔に赤旗を立てながら三十分ほどでコルに着く。ちょうどコルの下で、スプリング氷河がU字形に曲り左はステイル氷河の方へ登っている。その峠が大きな半円を描き、かなたにウッド峰のピラミッドがのぞいている。ここから見ても丸山は丸く、上にステイル峰が胡座をかいている。U字形の右側には台地状のハリソン峰がある。美しいカールの下にすこいアイスフォールが懸っている。スプリング氷河のクレバスや氷河上の湖も足下にはっきりと見える。

ウォルシュは首が痛くなるほど見上げなくては頂を見る事ができない。西稜とウォルシュコルとの間のアイスフォールには、クレバスが青黒い口を大きく開いている。アイスフォールは二段になっていて、その間がどうやら対岸へ渡れそうだ。しかしそこまで氷河の端を百メートルほど登らねばならぬ。氷塔が乱雑に散らばっているし、小さなクレバスがたくさんある。ヒドンクレバスもたくさんありそうだ。

スプリング氷河から濃いガスが風と共に湧き上がり、あたりをすっかり包み隠してしまった。ルートの不安を残したままわれわれは明日に偵察を譲り、豆つぶの様なB・C目指してストックを突き放した。ザラメ雪は深いシュプリー

ルを付ける。長い直滑降を一度やると、もうベースまで帰ってしまった。

七月も下旬を迎え、この北国にも夜が訪れるようになった。八時ごろになると太陽がステイールの山陰に隠れ、ウォルシュの山腹から恐しいほどに冴えた月が淡青色の雪の肌を照らす。さらに夜が更けると、アラスカの象徴、北斗七星が北極星と共に頭上に輝く。刺す様な寒気がやってきて、防寒衣をまとい、皆テントの中でストーブの暖を求め、明日は本格的なウォルシュの偵察と、バージンピークのスキー登山を試みる事を話し合った。

ウォルシュの偵察には、増田、中園、中村、井上の四名が当った。赤い標識に従って昨日の通りウォルシュコルへ着いた。ここから水河の横断を試みるわけだが、小さなヒドンクレバスを予想してスキーを付けたままザイルを結び、ストックで雪を突いてクレバスの有無を確かめながら水河の岸をジグザグに進んだ。昨日定めたルートに沿って、一旦水河の左岸を百メートルほど登り、二つのアイスフォールの間の、平且な所へトラバースして行く。水河上へは十メートルほど下り、スノーブリッジのように見える所を渡らねばならないので、ここにスキーをデポしわかんをはいた。下段のアイスフォールのクレバスは、四百メートルほどの水河の幅いっぱい平行に開いている。所々スノーブリッジがかかっている外は、青黒い口が深く切れ込んでいる。上段は崩れたブロックが重なりあっている。ザイルをびんと張って、ピッケルで一步一步足場を確かめながら横断する。西稜末端のピークへは四十メートルほどの支稜を登って簡単に上へ出る事ができた。実に眺めのいい所なので漸くザックを置いて、写真を撮ったり地図を見たりして休む。これで西稜へのルートは確保されたわけで、後は西稜を頂上目指して進めば良い。ここから上部は、明日のアタックが全てを決めてくれる。われわれは帰路についた。水河の中の黒点・ベースをはさんでバージンピークを正面にして、この山のどこかを今は快適なダウンヒルを味っているであろう三人を噂する。スキーデポからザイルを繋いだまま滑って見る。スピードの調節が難儀だ。

頂上へ

七月二十二日、四時一もうすっかり夜が明けていた。五時に起きる事になっていたが、ジュラフを這い出しザックの中へ必要な物を詰め込む作業を始めた。起きた時いつもやるように、両手で顔を撫でてみるとガサガサしている。貧弱な髭が伸びているうえに、日焼けであちこち皮が剥けてあばた面になっているようだ。いまさら手入れをしてもはや何のたしにもなるまいが、とにかくサンクリームを塗り付けておいた。そのうち起きて来た中村さんと食糧テントで朝食と行動用のミルク、紅茶、罐詰等準備する。

七時十分、隊長に送られて、六人はベースを出発した。昨日の強い日射と夜の寒気で雪は堅く凍結し、アイゼンのツアックが快適にきしむ。てんでばらばらに、まるでちよっとそこまですといった風にウォルシュコルへ向う。西稜の末端ピークへは八時ちよつどに着いた。ここで二人ずつアンザイレンし、増田・井上、中園・中村、坂本・坂西の順で処女雪にトレースを付けて行った。今日もすばらしい天気だ。逸る心を抑えて、ガラスの粉を播いたようなさらさらと乾燥した雪のラッセルが始まる。トップに立った僕と増田さんは交代で第一部の急斜面を登り切った。ここから傾斜が緩くなり、細いナイフリッジとなった。左手スプリング水河側は水河の底まで一直線に千五百メートルほどの高差で切れ落ちている。右側もカールの底まで、吸い込まれそうな斜面だ。朝日に照らされて雪の結晶が七色に光り、急斜面の氷の塊が青白く迫り幻想的な光景を作り出している。一步、一步、登るにつれてローガンが、ステイトルが、ルカニアが、さらにウッドが、次々に頭を現わし水平線を飾ってゆく。

尾根が鋸刃状に起伏し始める手前で初めて休む。さっそくすばらしき山々と水河にレンズを向ける。氷の上の新雪は不安定でもすればアイゼンが滑りやすく、写真を撮るのもかなりの危険がともなう。

テルモスの紅茶をすすり、再び頂上目指して確実な歩を進める。第一のピークは僕が南側から日射で少しゆるん

だ堅雪をカッチャイングして越す。そこからはしばらく平担で膝までのラッセルが苦しい。そろそろ四千メートルを越すはずだ。二つめのピークは少し岩が出ていて薄く新雪がついている。その手前にピークをまく風のためかテント一張分ほどのコルがあり、ここで二度目の休憩を取る。

増田さんがトップに出てステップを切る。そこで疲れた二人は後続の中園・中村のザイルパーティに先頭を譲る。第三のピークは最も急でしかも北面の水にステップを切る。ちょうど丸い棒を斜めに切ったような鋭い稜線をなしている。慎重に登る中村さんの時々ガスが包む。この悪場を過ぎると尾根は広くなり、傾斜が増して来る。膝を越す深いラッセルとなったが、中園・中村パーティは全くすばらしい早さで進む。四千三百メートルあたりで所々岩が露出したし、西稜は尾根というより斜面のふくらみと思えるほど広くなった。岩の間でアスパラガスの確話を開け昼食をとった。もうバージンピークはずっと下に見える。正面にスティール峰の美しい姿がある。こんなに高い所にいるのに身体は暖かい。時計はもう二時を指している。時々頂上をガスが包むようになったが、天気は悪くなりそうもない。

坂本・坂西パーティが先頭になって少し登ると雪は少なくなり、堅い水が現われてきた。それに呼吸するように尾根は傾斜を増した。最後の百五十メートルほどはずっとステップを切る必要があった。青緑の水はコンクリートを打つようで、カッチャイングを思う様にはさせない。ピッケルを振る手が疲れる。スカイラインに続く鋭角な垂直に近いと思われる五十メートルほどのリッジを登り切ると、広い台地に出て左手に北稜のピークがあった。頂上は台地の西の端の小さな瘤だった。僕はトップに出してもらって、嬉しさのあまり走って頂上に立った。手袋をとって次々と頂上に立つ五人と握手を交した。全員あらん限りの声でバンザイを叫ぶ。

頂は尊い。大自然のみが観客である舞台。そこでの一つ一つの動きが忘れる事のない記憶となって臉に焼き着いてしまう。四時四十分。スライドの入ったカメラでパンoramを撮り、白黒のフィルムを入れていくうちにガスがまいて

しまふ。今日の目付けとわれわれの名前、神戸大学の名を書いた赤旗を頂上に立てる。

危険な下降が始まった。吸い込まれるような急な斜面を一步一步下る事は、ちょうど背にした重荷を一つ一つ取り去っていくような気分だ。

頂上直下でスリップした。一瞬水河の底へ落ちて行く自分を見たような気がする。次の瞬間、自分が何をやったのかはつきりと解った。ピッケルを胸にあて上体をひねって堅い雪にピッケルの刃をあてると簡単に止まった。ああ助かったかと思うと、急に心臓が早鐘のように鳴り出した。確保の姿勢でザイルをしっかりと握っている増田さんの目と合って、その目が笑っているのを知ると思わず笑ってしまった。さすがにそれからの下降は慎重になった。登頂の喜びに浸る気分を戒め確保の手に力をこめる。

ナイフリッジにさしかかり、再び緊張が続く。三つの刃状ピークは登るよりはるかに困難だった。最後の下りにかかるころは、たそがれて尾根がとてつもなく長く感じ出す。日没の寒気で堅くなったトレースは、疲れた身体にはアイゼンを取られやすく危険だ。

西稜末端のピークで記念にと露岩の一片をザックに入れた。そして水河に下り、一日中付けていたザイルを解いてウォールシュコロへさらに下る。

もう真暗だ。雪の上にとっかかりと腰をおろすと一度に疲れが出てくる。ベースへ向ってコールすると返事が返って来る。五六歩行っては立ち止り、また数歩行って休む。ベースのほのかな明りと隊長の声がはっきり解るようになってから実に遠かった。

たった一本水河へ運んだウィスキーの栓を抜き、アルミヤプラスチックの食器について乾杯する。ミッドナイト、話は限りなく続く。